

自己教育力を育む教育相談

—— 個を伸ばす学級集団づくりを通して ——

与那原町立与那原中学校教諭 崎 山 喜代子
指導講師 糸満中学校教頭 山 城 直 三

内容要約

生徒一人ひとりの成長を促しながら、一致団結して行動できる、まとまりのある学級を作りたい。そのための方法として、構成的グループエンカウターの手法を取り入れてみた。その実践を通して、生徒も教師も、自由な雰囲気の中で、お互いを尊重し合いながら自己を表現することの大切さを知ることができた。また、自己理解と他者受容を繰り返しながら、信頼関係が深まることを、体験を通して知ることができた。

【キーワード】 構成的グループエンカウター、自己開示、自己理解、他者理解

目 次

I テーマ設定の理由	81
II 研究仮説	81
III 研究の全体構想図	82
IV 研究内容	83
1 「教育相談」のとらえ方	83
2 構成的グループエンカウターの学期ごとの目標と年間計画	85
3 構成的グループエンカウターを実施するときの心得	87
V 授業実践	88
VI 研究の成果と課題	90

自己教育力を育む教育相談

—— 個を伸ばす学級集団づくりを通して ——

与那原町立与那原中学校教諭 崎 山 喜代子

I テーマ設定の理由

学級担任として、「学習や行事に積極的に取り組み、仲の良い楽しい学級をつくりたい」と思う。だが、学級全員がいつでも前向きに活動する、ということは難しい。たいていは何人かの生徒が消極的だったり、反抗的だったりする。担任が、そういう一部の生徒の指導に追われていると、学級全体への気配りが、手薄になる。しかし、学級の大多数を占める前向きな生徒が、学級世論を形成することができれば、全体をよい方向に持っていくことができる。つまり、生徒同士でお互いの自己教育力を高め合うこと。そのための手法として、「育てるカウンセリング」の理論と方法を取り入れてみたい。

これまでに学級担任をしていて、生徒の家庭環境や性格や興味・関心などの違いから生じる、様々なトラブルに直面してきた。極最近の事例としては、男子生徒A男が授業中に勝手に席を立て歩き回ったり、奇声を上げたりして、他の生徒たちのじゃまをするという事があった。放課後に残して話し合いをしたり、静かに読書をさせたりしてみた。翌日の午前中は静かにしているが、午後まではもたないのである。

B子の場合は、少し事情が違っていた。学年半ばに転校してきて、なかなか友達が作れなかった。そんな時に父親から「最近B子が家で口数が少なくなった。学校で何かあったのですか。」と電話があった。学校に来てもらって話を聞いてみると、複雑な家庭の事情がうかがえた。それらの事情は決してB子の責任ではないが、転校してきて新しい級友たちに聞かれたら、口をつぐむしかないだろう。そのことがB子に友達を作りにくくしていたと思われる。そこで、あまり深刻に考えずに、さらりと受け答えをすることを、父親を通してB子にアドバイスしてもらった。その後、B子は元のように明るくなり、友達もできた。

A男の事例からは、周りの迷惑を考えずに行動する、わがままな性格を見ることができる。B子の事例からは、自己開示の方法の不慣れからくる、孤立の状態を見ることができる。周りの迷惑を考えて行動する事も、自己開示の方法も、これからの人生を生きていく上で、大切なものである。これらの「豊かな人間関係を築く力」を育てる方法として、育てるカウンセリングの一手法である、構成的グループエンカウンターを実践してみたい。

学年初めの4月には、打ち解けた雰囲気でも誰もが自分の学級として、安心して居られる、居場所感が持てる学級づくりをする。5月には集団の中での行動の仕方や、学級内の問題の解決の仕方などを、エンカウターの手法を用いて実践的に学習させる。6月には、グループでの作業や班がえなどを、協力し話し合って行える方向に持っていく。

2学期は、「仲間意識を高める」「勉強や学校に来ることの意義などについて考える」「自分を素直に表現できるようにする」の3つの目標に沿って、エンカウンターや話し合い活動を行う。

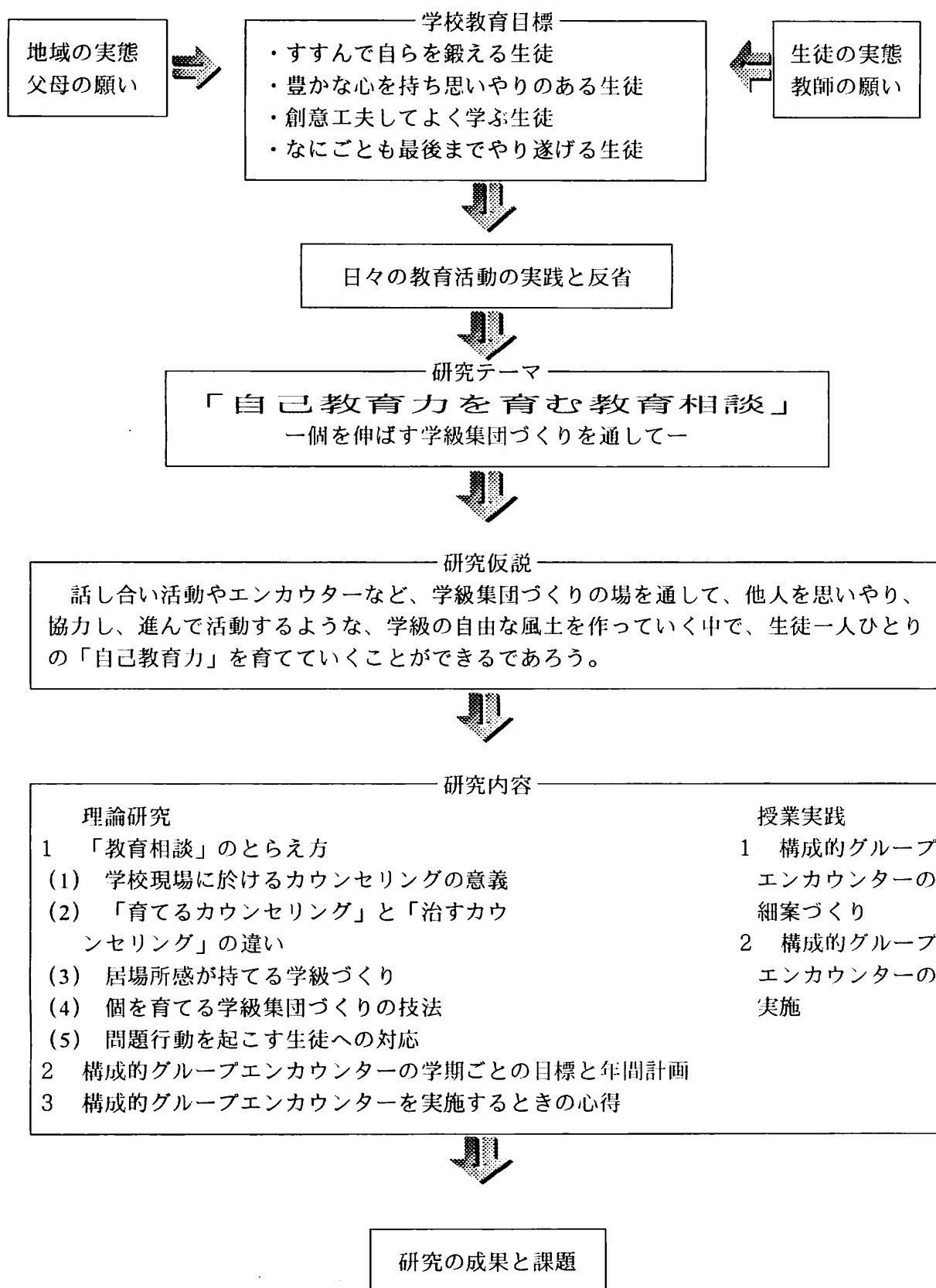
3学期は、「中学生として、また、学級の一員としての自覚を高める。」「一年間を振り返って、自分の足跡を確認する。」の2つの目標に沿って、エンカウンターや話し合い活動を行う。

以上の手順で時間と場所を確保して、協力して活動していく中で、人間関係を育てていく。生徒たちは、学級の中での話し合い活動や、エンカウンターなどの集団づくりの場を通して、自己理解と相互理解を繰り返しながら、自らを高め合うことができるであろう。そこで、個を伸ばす学級集団づくりを通して、生徒一人ひとりの「自己教育力」を育てることができると考え、本テーマを設定した。

II 研究仮説

話し合い活動やエンカウンターなど、学級集団づくりの場を通して、他人を思いやり、協力し、進んで活動するような、学級の自由な風土を作っていく中で、生徒一人ひとりの「自己教育力」を育てていくことができるであろう。

Ⅲ 研究の全体構想図



IV 研究内容

1 「教育相談」のとらえ方

(1) 学校現場に於けるカウンセリングの意義

これまでの学校教育は、「知識」の伝授に比重が置かれ、主体的な学習態度や「考える力」を育てることが後手に回ってきたと言える。その結果、教えてもらえるのをじっと待っている生徒が増え、「自ら学ぶ」という主体的な学習能力が低下してきたと考えられる。なぜなら、「知識」の伝授は、「わかりたい」「育ちたい」という自発的な「学びの心」に、直接的には結びつかないからである。「学びの心」は、育てるものであり、伝授できるものではない。

また、教師にとって、情熱は大切な要素だが、情熱を支える教育技術が伴わなければ、十分な効果をあげることは難しい。情熱で体当たりして失敗したとき、生徒も教師も、ともに挫折感を味わうことになるだろう。更に、情熱を注ぎ込んでいるつもりが、実は生徒を丸め込んで、教え込もうとしているのではないかと、時々自問してみることも必要だ。ともあれ、教師としての情熱は、磨かれた教育技術に支えられることによって、生きた力として、生徒たちに還元される。

では、生徒の「わかりたい」という心を育てる教育技術とは、何なのか。私はここで、「育てるカウンセリング」を挙げたい。更に掘り下げて言うなら、「育てるカウンセリング」の中の、「構成的グループエンカウンター」こそ、現今の学校現場に求められている教育技術だと言える。その根拠は、「構成的グループエンカウンター」の持つ、次の3つの特性にある。① 教師と生徒の、心の交流が可能である。② 生徒一人ひとりの、自己理解や自己発見を、支援する方法である。③ いじめや不登校・校内暴力などの予防に有効である。つまり、構成的グループエンカウンターの実施によって、自己理解や相互理解が深められ、更に、集団内の信頼関係が築かれるのである。このような集団からは、いじめや不登校・校内暴力などの問題は発生しにくい。よって、「育てるカウンセリング」の、学校教育に寄与する力は大きい。

(2) 「育てるカウンセリング」と「治すカウンセリング」の違い

カウンセリングは、大別して次の3つにまとめられる。

- ①「教育・発達」を役割とするもの。（「育てるカウンセリング」）
- ②「予防」を主たる役割とするもの。（「防ぐカウンセリング」）
- ③「治療・矯正」を役割とするもの。（「治すカウンセリング」）

上記の①と②を併せて、「育てるカウンセリング」と呼ぶこともある。この①と②は、主に教師の行う分野である。③は、主にスクールカウンセラーや臨床心理士の行う分野である。双方の違いは、生徒を見るとき、視点の違いにある。「育てるカウンセリング」は、発達の視野に立って、問題を抱える生徒（クライアント）自体に焦点を当てる。そして、生徒が自分で問題に対処する能力を、育てることに目標をおいて援助する。それに対して、「治すカウンセリング」は、病理的視点から、表面化した問題行動や、隠れた傾向に焦点を当てる。そして、カウンセラーが適切な治療方法を提示し、生徒（クライアント）は、それに従うことになる。

例えば、中学1年の新学期早々、不登校気味の生徒がいたとする。「育てるカウンセリング」では、その生徒が登校に向けて、主体的かつ具体的に行動ができるように援助する。そのために、不登校の原因や、不安をつきとめようとする。一方、「治すカウンセリング」では、登校という行為がもたらす不安や、登校しなければならないという考えとの葛藤に焦点を当てる。そして、その原因や不安を取り除くことを優先する。

しかし、「治すカウンセリング」の対象になる問題の中にも、教師が対応をせまられる問題も多い。例えば、授業中に屁理屈ばかりこねて面白がっている生徒や、私語の多いクラスに、どう対応するかなどである。この場合は、スクールカウンセラーや臨床心理士に、意見を求めることはできても、実際に対応するのは、教師自身である。

結論として、「育てる」ために治療が必要なときは、「治すカウンセリング」の技法も、教師に必要とされるということ。併せて、スクールカウンセラーや臨床心理士との、協力体制も重要である。

(3) 居場所感が持てる学級づくり

「居場所感が持てる学級」とは、次の3つの条件が満たされている学級のことである。

- ① プライバシーが保護されている。
- ② くつろげる。
- ③ 自分の良さを存分に発揮できる。

①について言えば、思春期にあって揺れ動いている中学生の、傷つきやすい心の状態を十分に考慮して、個人情報決して漏らさないこと。そういう教師の姿勢に守られて、生徒は安心して集団の中にとけ込める。

②については、「くつろぐ」が行き過ぎて、周りの迷惑にならないように気をつけること。例えば身の回りの整理整頓など、家庭での生活習慣によって、個人差が大きい。そこで、「集団生活の規律を守ろう」という意識を、一人ひとりの生徒の中に育てる必要がある。その方法として、構成的グループエンカウンターが最適だと考える。

③についても、構成的グループエンカウンターは有効だ。周りが自分を肯定的に見てくれる、という安心感がある時、生徒たちは素直に自分を表現する。また、相互理解や信頼関係が深められていけば、生徒一人ひとりの良さが、自然発生的に引き出されるであろう。

これまで、繰り返し構成的グループエンカウンターの特性を強調してきた。確かに、エンカウンターの体験は有意義であり、それだけでも学級の雰囲気は変わる。しかし、エンカウンターは演習として作られた状況であり、生徒にとっての現実の生活の場とは言えない。大切なのは、実際の学級生活の中で、お互いに思いやり、本音で話し合い、協力して活動していくことである。その様子を、教師は日頃から観察を通して、知ることができる。日頃の観察以外に、生徒や学級の状態を知る方法として、面接や調査（アンケート）といった方法がある。

学級担任は、教育相談の立場から、「エンカウンター → 日常の生徒の様子を観察 → 面接や意識調査」を、必要に応じて繰り返し行うこと。そうすることで、常に生徒や学級の状態を把握することができる。また、学級内に問題が起きたときは、早期発見、早期治療へとつないでいくことができる。それは、居場所感の持てる学級づくりをするための、重要な技法だと考える。

(4) 個を育てる学級集団づくりの技法

これまでに、学級担任をしていて、生徒の家庭環境や性格、興味・関心などの違いから生じる、様々なトラブルに直面してきた。そして、生徒たちの抱える問題の、多様さや深刻さに圧倒されて、幾度となく、自分の力量不足に悩んできた。しかし、教師は、生徒の持ち込む様々な問題に、教育のプロフェッショナルとして、対処しなければならない。可能性を信じ、彼らの成長する力を、どうやって引き出すかが、今、問われている。その方法として、「育てるカウンセリング」が提唱されて久しい。「カウンセリング」の目標は、個人の成長や発達を援助することであり、一人ひとりを育てることにある。「学級づくり」の目標も、やはり最終的には、一人ひとりの生徒を援助し、育てることにある。

私たち教師は、一日の大半を生徒たちと過ごしている。教師が何かを言っても、あるいは何かを言わなくても、結果としては、「何かをした」ことになる。例えば、絵を描いている生徒の横を通るとき、「うまいね。」と言え、その生徒をほめ、その描き方を支持したことになる。逆に、何も言わずに通り過ぎたら、無関心のように、生徒には映るかもしれない。このように、教師が意識するしないに関わらず、毎日、生徒に対して「何かをしている」のである。それならば、意識的に、プラスの方向に「何かをした」方がよい。その技法として、國分康孝編集「育てるカウンセリング」に、次の7つが挙げられている。「支持する」・「助言する」・「指示する」・「示唆する」・「ほめる」・「注意する」・「教師が自分を伝える（自己開示）」である。

更に、これらの技法を用いるときには、次の2点に気をつける必要がある。①生徒のその時の様子を、よく見ること。（教師はほめたつもりでも、生徒は逆にとってしまうことがあるので、後の反応も、よく観察する必要がある。）②自分の気持ちに目を向けてみる。（気づかずに、冷静さを欠いていることがある。）

また、生徒の能力が、自分を上回ったと感じた時や、生徒の言動に「大人の論理」を感じたときには、素直にそれを認め、受け入れること。そして、その生徒の力を活用することに力を注ぐとよい。教師の、そういう柔軟性あるいは人間的な大きさこそ、大切なのだ。そこを出発点に、生徒と教師の新しい人間関係がスタートするのだと思う。

(5) 問題行動を起こす生徒への対応

人は、人に温かく見守られているときに、自分の能力を存分に発揮できる。教師が生徒たちの全てを受容し、共感的に理解していく中で、生徒が自分で自分の問題や欠点に気づき、行動を改めていければ、それが一番よいと言える。しかし、学校現場では、他の生徒へ及ぼす影響もあり、それまで待ってられないことが多い。だからといって、「こうしなさい」「それはしてはいけない」と、強制的に指示したのでは、生徒の自主性は育たない。そこで、厳しさと優しさを、両立させる方法が必要になる。

私が受け持った生徒で、髪を赤く染めてきた生徒がいた。教師の立場から、行為そのものは受容できなかったが、なぜ髪を染めたのか理由を聞いてやり、染めなくなった気持ちに共感してあげることができた。継続して生徒と話し合っていく中で、学習へのつまずきや家庭への不満など、問題行動への原因を見つけることができた。また、時間をかけて話し合うことで、生徒は、「聞いてもらえた」「わかってもらえた」という気持ちになり、指導を受ける心の準備が整ったようだった。髪を直させるのは、それからでもよいと思う。生徒自身が、「髪を直そう」と主体的に行動することが、大切なのだと考える。そういう視点に立ったとき、生徒指導と育てるカウンセリングは、その根幹に於いて一致する。

2 構成的グループエンカウターの学期ごとの目標と年間計画

構成的グループエンカウターは、教師が学級の様子を見ながら、必要を感じたときに、随時行うことができる。しかし、教育的・予防的カウンセリングの立場から、年間を通して、計画的に実施することで、より効果を上げることができる。そこで、学期ごとの目標を決めて、構成的グループエンカウターの、年間計画を立ててみた。

(1) 構成的グループエンカウターの学期ごとの目標（1年～3年共通）

① 1学期の目標

- ・ 居場所感の持てる学級づくりをする。
- ・ 相手の立場に立って、考えたり行動したりできるようにする。
- ・ お互いに話し合って、協力して活動できるようにする。

② 2学期の目標

- ・ 仲間意識を高める。
- ・ 勉強や学校に来ることの意義などについて考える。
- ・ 自分を素直に表現できるようにする。

③ 3学期の目標

- ・ 中学生として、また、学級の一員としての自覚を高める。
- ・ 一年間（これまで）を振り返って、自分の足跡を確認する。

(2) 構成的グループエンカウターの年間計画

1年

（國分康孝監修「教師と生徒の人間づくり」第1集～第4集参照）

学期	題 材	ね ら い
一 学	出会いのステップ 私が誇りに思うこと あなたは聖徳太子 未来を予言する	・ まだよく知り合っていない級友にも、心を開いて自分を語り、交流の機会をつくる。 ・ お互いに、得意なことを話し合う中で、他者を認め合い理解していく。 ・ 人の話を集中して聞くことの難しさを知る。 ・ 誰かが現在やっている無責任な行為が、未来の社会や地球に及ぼす影響について考える。
	コーヒーポット	・ 嘘をつかずに、相手の質問をかわす方法を考える。

期	伝達する よく見てください	- 言葉で正確に伝えることの難しさを知り、日頃の会話のあり方に関心を向ける。 - 言葉を使わずに、気持ちを伝えることの難しさを知り、相手を尊重する心を育てる。
二 学 期	ほめあげ会 なぜ学校へ行くの ユーモラスな体験談 発表会 プラスマイナス 物は使しよう 無人島	- お互いに、相手のよいところを見つけて、なぜよいかなど、話し合う。物事を肯定的に見る学習にする。 - 学校をテーマにして話し合う中から、自分を見つめ直し、自律について考える機会にする。 - 日常生活の中のユーモアを掘り起こし、ユーモアの持つ役割に気づく。 - 物事を、プラスとマイナスの両面からとらえて話し合い、創造的な思考力を養う。 - ゲームを通して、柔軟な思考力を養う。 - 想像力をふくらませて、未知のことについて、友と語り合い、生活観を見直す。
三 学 期	がんばり賞あげよ と 思い出を語ろう 成功物語 連想ゲーム	- 友達の良いところを見つけて、認め合う。友達への温かい視線を育てる。 - 中学生生活1年間を振り返って話し合い、友情を深める。 - 自分の成功した体験を、話し合う。相手の立場を尊重することで、意志の疎通を図り、自信につないでいく。 - 頭にひらめいたことを、自由に言える雰囲気を作り、集団の親密さを深める。

2 年

(國分康孝監修「教師と生徒の人間づくり」第1集～第4集参照)

学期	題 材	ね ら い
一 学 期	インタビュー 4つのベアリング あなたは聖徳太子 私が誇りに思うこと ストーリーゲーム 宇宙船S.O.S. ゼスチャー	- 級友の特徴や、ユニークな面を発見し、親睦を深める。 - 他人のふるまいや気持ちを、感じ取って動くことを、グループや学級全員で、共通体験する。 - 人の話を、集中して聞くことの難しさを知る。 - お互いに、得意なことを話し合う中で、他者を認め合い、理解していく。 - 友達と協力してストーリーを完成させる中で、想像力を養う。 - 想像力を働かせて、危機から脱出する可能性を探す。 - ちょっとした動作で、意志が伝わることもあることに気づく。
二 学 期	あなたの〇が好きです 私はどんな人 PR合戦「私は有名人」 傾聴する いじわる爺さん なぜ学校へ行くの 早合点しないでね	- お互いに友達から良い点を言ってもらって、自尊感情を高める。 - お互いに観察し合って、その人の思考や感情を理解し、共同体験をする。 - 人前で上手に話すには、どうしたらよいかを考え、感じる。 - 一方的なコミュニケーションが、対話に比べて難しいことを体験する。 - 周りから反対意見で攻められたとき、自分の意見を押し通したら、どんな気持ちになるか体験する。 - 学校をテーマにして話し合う中から、自分を見つめ直し、自律について考える機会にする。 - 客観的な情報受理の大切さを考える。
三 学 期	私の自画像 思い出を語ろう 大切なもの 20年後の私 成功物語 連想ゲーム	- 言葉による自画像を、級友と協力して形成し、人間理解を深める。 - 中学校生活2年間を振り返って話し合い、友情を深める。 - 自分の価値観を確認するとともに、他の人の価値観や考え方を理解し、よりよい人間関係を考える。 - 目標に向かって、今をどう生きるかを考える。 - 相手の立場を尊重することで、意志の疎通を図り、自信につないでいく。 - 頭にひらめいたことを、自由に言える雰囲気を作り、集団の親密さを深める。

学期	題 材	ね ら い
一 学 期	コマーシャルを作ろう あなたは聖徳太子 気が利く私 連想ゲーム 伝達する コーヒーポット	- 自分の才能や個性を、パンフレットの形にまとめて、自分自身をP.Rする。お互いを理解する。 - 人の話を集中して聞くことの、難しさを知る。 - 言葉には表れない、相手の気持ちを推しはかって行動することで、親密さを深める。 - 頭にひらめいたことを、自由に言える雰囲気を作り、集団の親密さを深める。 - 言葉で正確に伝えることの難しさを知り、日頃の会話のあり方に関心を向ける。 - 嘘をつかずに、相手の質問をかわす方法を考える。
二 学 期	私はどんな人 立場変われば P R合戦「私は有名人」 なぜ学校へ行くの 私はニュースキャスター	- 用意された質問に答えることで自己をみつめ、現実の自分を素直に受容する。 - 役割を交替して演じることで、相手の身になって接することの大切さを知る。 - 人前で上手に話すには、どうしたらよいかを、考え、感じる。 - 学校をテーマにして話し合う中から、自分を見つめ直し、自律について考える機会にする。 - 人前で、自分の意図していることを、正確に述べるにはどうしたらよいかを、考え工夫する。
三 学 期	20年後の私 思い出を語ろう 成功物語 音楽を描こう 電話ゲーム	- 目標に向かって、今をどう生きるかを、考える。 - 中学校生活3年間を振り返って話し合い、友情を深める。 - 相手の立場を尊重することで、意志の疎通を図り、自信につないでいく。 - 短い音楽を何度か聴いて、イメージや感情を絵で表現する。その絵を通して意見を交換し、体験を共有する。 - 相手の話に耳を傾けながら、自分を主張して、会話を思い通りの方向に持っていく。

3 構成的グループエンカウンターを実施するときの心得

教師が、どんな目当てを持って実施するかによって、エンカウターの効果も変わってくる。そこで、生徒一人ひとりの成長を促し、更に、学級全体をまとまりのある方向へもっていくためには、どのエクササイズを選んだらよいかを最初に考える。次に、選んだエクササイズを、学級の実態に合わせて再構成し、生徒一人ひとりが自己理解と、他者受容をする場面を設定する。更に、生徒同士による、振り返りや学び合いの場を設定し、孤立したり、心に傷を残したりする生徒がいないように、心配りをする。

以上のことに加えて、次の(1)～(4)も、実施するにあたって熟知しておきたい。

(1) 構成的グループエンカウンターとは

エンカウンターとは、「心と心のふれあい」という意味である。方法として、いろいろなエクササイズ(演習)を用いる。目的は、①生徒たちが、自分のことや友達のことが、一層わかるようになること。②お互いが、独立した一人の人間として、対等な人間関係をつくれるようになること、である。更に、構成的とは「エクササイズ・グループサイズ・時間の枠」で構成するということである。

(2) リーダーの心得(姿勢)

構成的グループエンカウンターを展開するときの、リーダーの取るべき姿勢 ①むやみやたらに「〇〇せよ」と、命令や強制をしない。②「ふり返り」を通して、メンバーの幸福になる権利を尊重する。(エクササイズの後に、もしかしたら心の中にしこりや傷が残っている者がいるかもしれない。そこで必ず「今のエクササイズを通して、感じたこと学んだことなどを、話し合ってください。」と要請する。)

(3) 実施上の留意点

- ① 必要なときは、学級の実態に合わせて、内容に工夫を加える。
- ② エクササイズ(演習)のねらいやルールを、わかりやすく、きちんと説明する。
- ③ どうしてもいやがる生徒には、参加を強制しない。
- ④ 次の4つの項目を、参加者に徹底する。
 - ア 発言者をからかったり、ちゃかしたりしないこと。

- イ 人を批判したり、評価したりしないこと。
- ウ 人の気持ちに、敏感であること。
- エ お互いに、あるがままを尊重しあうこと。

(4) エクササイズを選ぶ基準

- ① 学級全員が、楽しく参加できるもの。
- ② エクササイズの実施が、生徒に心の傷を負わせる心配のないもの。
- ③ 一学級の生徒を対象にして、同時に実施できるもの。
- ④ リーダー（教師）が、一人でも、指導し実施できるもの。
- ⑤ 生徒の対人関係の改善に、効果が期待できるもの。
- ⑥ 教師自身が、好きになれるもの。

V 授業実践

1 構成的グループエンカウターの実施

学級の中には、様々な個性を持った生徒がいる。一人ひとりの個性がぶつかり合って、新しい個性が創られたり、時にはトラブルが生じたりしている。トラブルが生じる原因として、お互いに相手の個性を受け入れられなかったり、対処の仕方が不慣れだったりする場合が考えられる。学校生活を送っていく上でも、将来、社会人として生活していく上でも、他者の個性や考えを受け入れたり、対処したりする能力は必要とされる。更に、他者の思いや感性に気づく優しさや、自分の思いや考えを、上手に相手に伝えることの必要性にも気づかせたい。そのための手法として、構成的グループエンカウターを実施する。

- (1) 学級の実態 学級の一人ひとりを浮き彫りにして、更に、学級の全体像をつかみたい。というねらいで、「数研式POEM」の心理検査を、平成11年11月に実施した。その結果、学級全体としては、「適応のタイプの出現率」が54%（全国56%）で、平均的な学級ということがわかった。しかし、個々の生徒を見ると、不適応が5人、過剰適応が6人いる。更に、「予想される問題傾向」を見ると、少数だが、いじめ・利己的非行・攻撃的非行・怠学に該当している者がいる。

- (2) 教材名 「ユーモラスな体験談発表会」

- (3) 教材のねらい 実生活の中のユーモアを掘り起こし、ユーモアの持つ役割に気づく。

- (4) 本時の目標 ①自分のユーモラスな体験を、みんなの前に開示できる。
②友だちの話に耳を傾け、共感して聞ける。

(5) 展 開

場 面	生徒の活動	教師の指示・留意点
導 入	1 リラックスして話を聞く。 共感的理解 他者受容	1 この時間は、みなさんが、生まれてから今日までに体験した、ユーモラスな体験を発表してもらいます。一人が1つ発表すれば、学級全体では39楽しい話が聞けることになりますね。では、最初に先生の体験を話しましょう。 ＜雰囲気づくり＞ (2つ3つ、話を用意しておく。)
	2 みんなで楽しむためのルールの大切さを知る。 信 頼 感 他者受容	2 この時間を楽しいものにするために、守ってほしいことが、4つあります。 ① 人をからかったり、ちゃかしたりしない。 ② 人を悪く言ったり、比べたりしない。 ③ 人の気持ちを大切に作る。 ④ ありのままを認め合う。
	3 これまでの、自分の体験を振り返る。	3 では、全員、目をつぶってください。 自分が生まれてから、今日までの間で体験した、いろんなことを、思い出してみてください。

展 開	エ ク サ サ イ ズ	自己認識 自己理解	楽しかった、愉快だったということが、すぐに思い出せますか。 ＜振り返りの指示＞ (まだ声を出さないように、注意する。) 時間が経つと、失敗談でも笑って話せるものです。思い出した中から1つ選んでください。
		4 目を開けて、ワークシートにユーモラスな体験を書く。 自己開示	4 目を開けて、自分の体験を用紙に書いてください。(ワークシートを配る) ＜ワークシートの記入の仕方の説明＞ 題名をつけると、より楽しくなりますよ。 楽しさが伝わるように工夫して、短くまとめましょう。 ＜机間巡視をして記入状況を見る＞
		5 4～5人のグループをつくる。 自己開示 共感的理解 相互理解	5 では、グループをつくってください。 グループ内で、体験談を発表しあってください。 友達の話を、要点をメモしながら、聞いてください。 ＜自己開示を促す＞ ＜聞くときの注意＞
		6 グループの中から、愉快な話を1つ選ぶ。 自己主張 他者受容 相互理解	6 グループの中から、一番楽しい愉快な話を、1つ選んでください。
		7 発表者を選ぶ。 相互理解	7 各グループの、発表する人は、前へ出てください。 ＜発表の仕方の説明＞ みんなで、発表者に拍手をしましょう。
		8 聞き手は、発表者に注目して聞く。 役割遂行 共感的理解	8 一人ずつ発表をしてください。 みんなは、話す人の立場になって、肯定的に聞いてください。 ＜聞くときの注意＞
		9 友だちの話を、振り返って話し合う。 振り返り 学び合い	9 友だちの体験談を聞いて、どうでしたか。 自分も、似たような体験をしたことはありませんか。 ＜振り返りを促す＞
		10 ユーモアのない生活を、想像してみる。 気づき	10 私たちの生活の中に、ユーモアがなかったら、どうなると思いますか。 ＜気づきを促す＞
ま と め	シ ェ ア リ ン グ	11 感想を書く。 充実感 存在感 自己肯定感	11 今日の授業の、感想を書いてください。 ＜机間巡視をして、書けない生徒の援助をする＞

(6) 教師の反省と考察

今回の第一の反省点は、自分自身が未消化のまま、生徒の前へ立った、ということである。手順をしっかりと頭に入れはしたものの、生徒の反応の予想がつかず、直前まで不安であった。第二の反省点は、前もって予告してユーモラスな体験談を準備させることなく、いきなり当日に臨んだことである。これは、やはり生徒たちに、無理を強いることになった。体験談の開示が少なかったのは、そのせいだろう。しかし、生徒たちは、「おい、君のあの話、いいんじゃないか。」と一人が言えば、「ダメ。」と拒否したり、お互いの間では、結構話のネタを出し合っていた。

生徒の間から出てきたユーモラスな体験談は、中学生らしいはつらつとしたものや、ほほえましいものが多かった。その例を3つ挙げる。

- ・ 1年生大会の時、ハーフパンツのポケットに、穴があいていることに気がつかなくて、あめ玉を入れておいた。一緒に歩いていた友だちに、あめ玉をあげようと思って、ポケットに手を入れたが、何もなかった。歩いて来た道を振り返ると、ポツリポツリと、あめ玉が並んで落ちていた。
- ・ バスケット部の先輩は、練習中に自分の打ったシュートが決まらないうと、リングに向かって、よく「おにっ」と言う癖がある。そのまねをした他の先輩が、間違えて「ウニっ」と言った。
- ・ 先に床に就いた弟が、目をこすりながら起きてきた。冷蔵庫を開けるので、何を取り出すのかと見ていると、パジャマのズボンをおろし始めた。「えー、ここはトイレじゃないよ。」と、私のほうがあわててしまった。弟は、時々ねぼけて変なことをする。

また、生徒の感想からは、クラスメートのありのままの姿を受容していること、自分自身も肯定して受け止めていることがわかる。次に、生徒の感想の例を6つ挙げる。

- ・ 結構、みんなドジなことをするんだなと思った。
- ・ 情景を思い浮かべながら聞くと、一層おもしろくなると気がついた。
- ・ ユーモアがなくなったら、きっと毎日がつまらなくなると思う。
- ・ どの話も、おもしろくて、どこにでもありそうな話だった。
- ・ その場に居合わせていたら、もっとゆかいだろうなと思った。
- ・ たまにはドジをしてもいいかな、と思った。

私自身も、軽い失敗談を話すことで、一歩生徒へ近づけた気がして、楽しめた。

構成的グループエンカウンターエクササイズでは、その日の生徒の状態に合わせて、内容や長さを修正しながら、その日の目標に近づけて終わることができる。つまり、教科の授業と違って、今日できなかった分を、次の時間に持ち越すということはない。だから、教師のほうにも、楽しむ余裕が生まれてくるのだと思う。

VI 研究の成果と課題

今回の研究の第一の成果は、生徒たちが心を開いて話し合うことができたということと、それを共感的に聞くことができたということである。学級のみんなで、愉快的思い出を話し合っ、共有することができたのである。その話し合いの過程を通して、生徒同士は、自己理解と他者受容を繰り返し、相互理解の精神に立って話し合うことを、学習したのである。

今後は、生徒一人ひとりの自己理解と、相互理解の上に立った共感的理解を、学級風土として定着させることを目標に、エンカウンターを計画的に実施していきたい。そのための年間計画を作ることができたことも、今回の研究の大きな成果と言える。

今後の課題としては、今回作った年間計画を、更に練り上げて、より良いものにしていくことと、年間計画に沿った細案を作ることである。もう1つ、実施の段階では、予告や準備の必要なものは、余裕を持って早めに取り組むということも、今回の実践から学んだ教訓である。

<主な参考文献>

國分康孝	『育てるカウンセリング』	図書文化社	1998年
〃	『教師と生徒の人間づくり』第1集～第4集	瀝々社	1997年
藤田悦雄	『児童生徒理解に役立つ学校教育相談』	桑名市教育委員会	1997年